



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

日本国内で開催される短期集中型イマージョンプログラムによる英語教育の効果

メタデータ	言語: 出版者: 岐阜大学地域科学部 公開日: 2024-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笠井, 千勢, 阿久津, 元, 神原, 利宗 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/0002000489

日本国内で開催される短期集中型イマージョンプログラムによる 英語教育の効果

笠井 千勢 (岐阜大学)

阿久津 元 (鶯谷中学高等学校)

神原 利宗 (広島大学)

The effects of English education by short-term intensive immersion program held in Japan

Chise KASAI (Gifu University)

Gen AKUTSU (Uguisudani Junior and High School)

Toshimune KAMBARA (Hiroshima University)

(Received June 30th, 2023)

1. はじめに

本研究の目的は日本国内で開催される短期集中型イマージョンプログラムが参加者にどのような効果をもたらすかを検証することである。コロナ禍における海外語学研修の中止、他校との差別化を図るために一般企業が主催するイマージョンプログラムを導入する学校が増える傾向にある。immersion (イマージョン) は、「浸すこと」を意味し、イマージョン教育とは、学びたい「言語環境に身を浸す」教育方法であり、外国語を教科として学ぶのではなく、タスク問題等に従事する際に手段として使う中で自然に言語を習得させると教育方法である。

イマージョンプログラムは、one-way immersion と two-way immersion に分類される。日本で主に採用されているのは one-way immersion で、同じ母語を話す学習者が外国語を用いて教科内容を学ぶことで二か国語に堪能になることを目指すものである。一方、two-way immersion では英語を母国語とする学習者と、外国語を母国語とする学習者が同じ教室で学び、教科内容も文字学習も両言語で行うプログラムである。いずれのプログラムもクラス全員が、母国語と第二言語両方の言語に堪能になり、地域学区が規定する教科学習レベルを達成し、異文化受容姿勢を育成することを目標としている (宇野、2008)。

本研究では、one-way immersion による5日間の集中プログラムに参加した高校生が、英語運用能力、動機、認知変化においてどのような変化が見られるか、プログラムの事前と事後を比較検証した。

2. 調査内容

2.1 イマージョンプログラム詳細

民営企業が提供する 5 日間の短期プログラムで参加費用は約 50,000 円である。EFL 教育の訓練を受けた英語母語話者 1 名を中心に、4 名の外国人スタッフがプログラム運営にあたる。今回参加したスタッフは日本国内の大学院に在籍する非英語母語話者であるが、プログラム実施中は英語を使い、考え、

まとめ、人の意見を聞く作業を生徒と行った。実施時間は放課後や冬休みの 5 日間を利用し、1 コマ 50 分の授業が 1 日 5 コマ開催された。

2.2 被験者

中高一貫の私立高校に通学する高校 1 年生 15 名、2 年生 3 名を対象とし、調査内容を説明した同意書に保護者が署名したのち参加した。

2.3 調査手段

本調査は下記の①～③の手段を用いて実施された。これらをプログラムの事前と事後に実施して比較検証した。

① The Minimal English Test (MET)

英語運用能力を測定するために MET を実施した。MET は約 5 分で英語運用能力を測定テストである。英語母語話者によって録音された英文を聞きながら空所に英単語を書き入れる形式で、大学共通試験(英語)や TOEFL、TOEIC 等と相関を示すテストである(Maki, Wasada and Hashimoto, 2003, Goto, Maki and Kasai, 2010 等)。

② Academic Motivation Scale

プログラムに参加する被験者の英語に対する動機を調査するために Academic Motivation Scale (Vallerand, Pelletier, Blais, Briere, Senecal & Vallieres, 1992, Schmidt et al., 1996 等) を実施した。日本人高校生に適したバージョンとして、加藤(2008)が用いた 20 項目で構成された質問紙を用い、7 段階のリッカートスケールで回答したものを集計した。20 項目のうち内発的動機は 8 項目、外発的動機は 12 項目である。

③ 形と素材の心理実験

Imai and Gentner (1997)、及び Cook, Bassetti, Kasai, Takahashi & Sasaki (2006)が使用した心理実験を実施した。前者の論文では、被験者の母語が実験刺激の選択に影響する結果が報告され(英語母語話者は形を選ぶ傾向があり、日本語母語話者は素材を選ぶ傾向がある)、後者の論文では、日本語母語話者で英語を習得したバイリンガル話者は、統計的に形でも素材でもなく中間的な選択方法を取ることが報告されている。

3. 結果

3.1 MET による英語運用能力測定:プログラムの事前と事後

プログラムに参加する前と後では英語運用能力にどのような変化が見られるか、t 検定を用いて検証した。60 点満点の MET の平均点は、事前 27.12 点、事後 29.72 点であり、統計的に有意な差が見られた($p < .001$)。図 3.1 は事前事後を比較したものである。

日本国内で開催される短期集中型イマージョンプログラムによる英語教育の効果

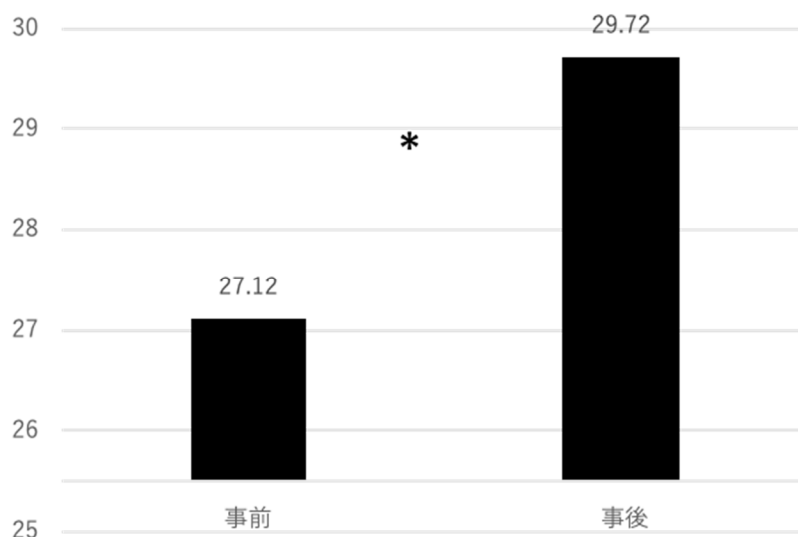


図 3.1 MET による英語運用能力測定:プログラムの事前と事後の比較

3.2 Academic Motivation Scale による動機の比較:プログラムの事前と事後

プログラムに参加する前と後では動機にどのような変化が見られるか、Academic Motivation Scale を用いて検証した。7段階のリッカート形式で回答した数値を比較したところ、事前 10.6 点、事後 11.9 点であり統計的に有意な差が見られた($p < .05$)。図 3.2.1 は事前と事後を比較したものである。

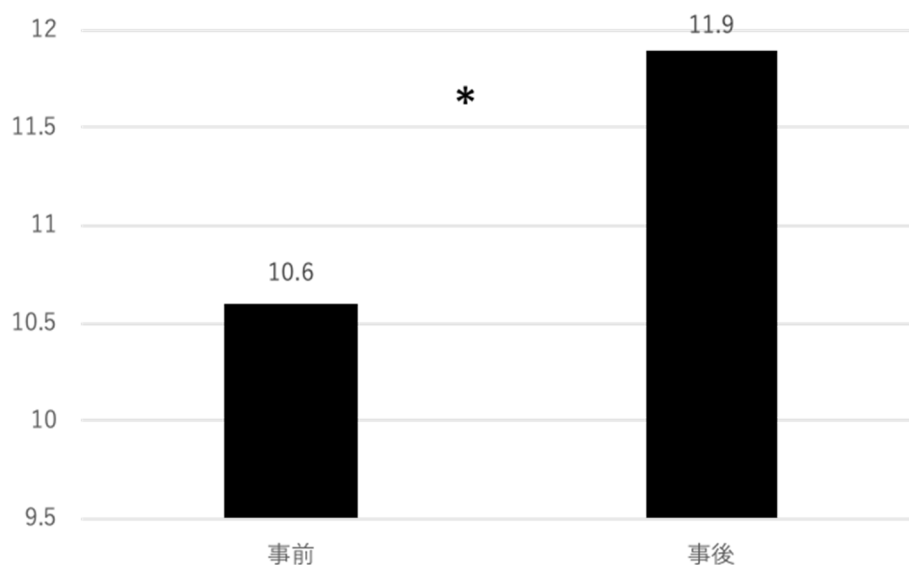


図 3.2.1 全動機項目の平均値:プログラムの事前と事後の比較 (*: $p < .05$)

20 項目の質問のうち、1～8 番が内発的動機について問う質問で、9～20 番が外発的動機に関する質問であった。内発的動機で事前よりも事後に統計的に有意な高い点数を示した項目は以下の通りである。

- 4 英語の学習は趣味だ
- 5 英語の授業がある日は楽しみだ
- 8 英語の学習を続けていきたい

有意傾向を示した内発的項目は以下のとおりである。

3 英語を学習するのは楽しい 6 外国人の友達を作りたい

外発的動機に関しては、事前よりも事後に統計的に有意な高い点数を示した項目は以下の通りである。

- 11 将来、外国に暮らすつもりなので英語を勉強したい
- 13 仕事に就いた後も、給料などで良い待遇を得たいから
- 14 テスト(試験・定期考査)などで、英語があるから勉強している
- 15 英検や TOEIC などの英語の資格試験に必要なだから、英語を勉強している

有意傾向を示した外発的項目は以下のとおりである。

- 19 英語を使える人になりたいから英語の勉強をする
- 20 英語を読む必要があるから英語の勉強をする

図 3.2.2 は事前と事後を比較したものである。

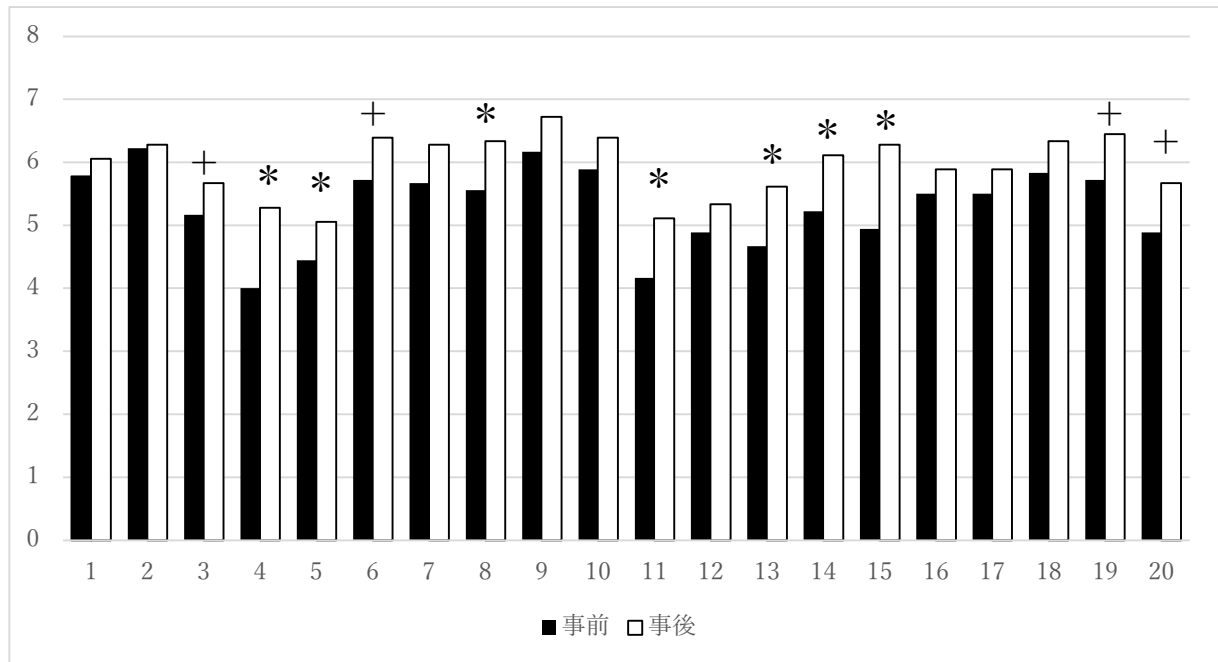


図 3.2.2 全項目別動機:プログラムの事前と事後の比較 (*: $p < .05$; +: $.05 < p < .10$)

3.3 形と素材の心理実験

心理実験では、機能がある個体 (Complex)、機能がない個体 (Simple)、物質 (Substance) の 3 種類の実験刺激を被験者に提示し、見本と同じ写真は右か左か解答させた (図 3.3.1)。

日本国内で開催される短期集中型イマージョンプログラムによる英語教育の効果

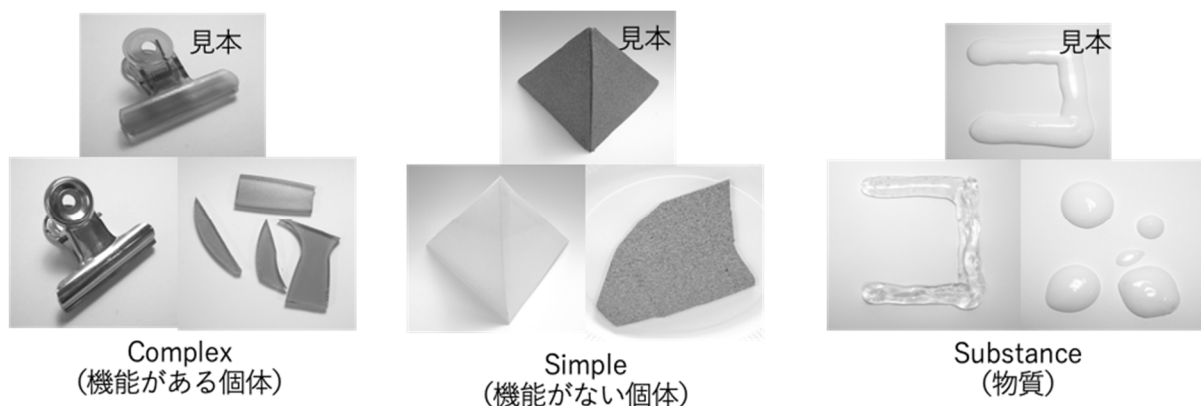
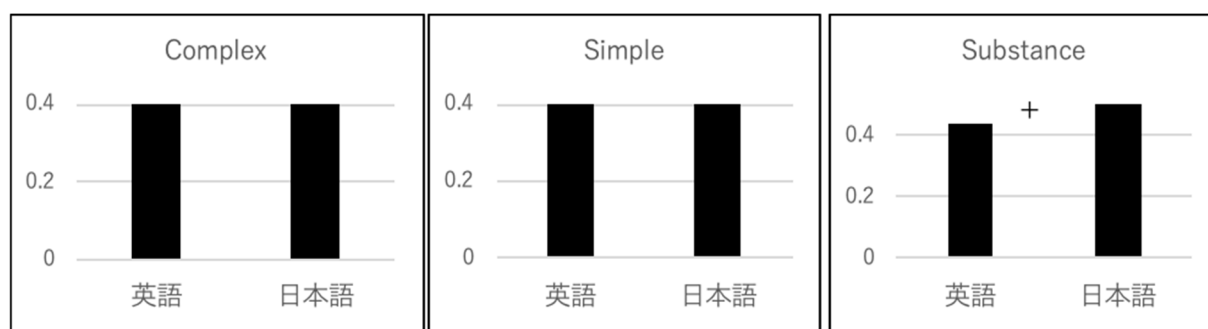


図 3.3.1 3 類の実験刺激

二つの言語環境(英語・日本語で語られるニュースが背景に流れる環境)で実施され、聞こえてくる言語によって解答が異なるかを調査した。本来であれば、プログラム参加の事前と事後にこの実験を実施する予定であったが、機材不良により事前の実験を行うことができなかったため、ここでは事後の実験結果のみ提示する。図 3.3.2 が示すとおり、機能がある個体(Complex)と機能がない個体(Simple)では言語による差は見られなかったが、物質(Substance)に関しては有意傾向が見られた。

図 3.2.2 英語・日本語環境の比較(+: $.05 < p < .10$)

4. まとめ

本研究は、日本国内で開催される短期集中型イマージョンプログラムがどのような効果をもたらすかを検証した。3つの手法を用いて検証した結果、METによる英語運用能力測定でプログラムの事前と事後では統計的に有意な差が見られ、事後の点数が高いことが明らかになった。また、事前と事後の動機に関しても、事前と事後間に統計的に有意な差が見られ、事後の動機が高いことが明らかになった。心理実験においては機材不良のため事前と事後を比較することができず、事後の調査しか行うことができなかった。しかしながら、事後の調査のなかで英語と日本語が聞こえる環境によって実験刺激の選択方法に有意傾向が見られたことから、プログラムに参加することで何らかの認知変化が起きる可能性が示唆された。あくまでも傾向であるため、今後の調査が必要である。

Cook, V., Bassetti, B., Kasai, C., Sasaki, M., & Takahashi, J. A. (2006). Do bilinguals have different concepts? The case of shape and material in Japanese L2 users of English. *International journal of bilingualism*, 10(2), 137-152.

Goto, K., Maki, H., & Kasai, C. (2010). The minimal English test: A new method to measure English as a second language proficiency. *Evaluation & Research in Education*, 23(2), 91-104.

Imai, M., & Gentner, D. (1997). A cross-linguistic study of early word meaning: Universal ontology and linguistic influence. *Cognition*, 62(2), 169-200.

加藤澄恵. (2008). 英語学習者と動機づけ: 内発的動機と外発的動機からの考察. *国際経営・文化研究*, 13(1), 57-65.

Maki, H., Wasada, H., & Hashimoto, E. (2003). Saishoo Eego Tesuto: Shoki Kenkyuu. *The Minimal English Test: A Preliminary Study) Eego Kyooiku(The English Teachers' Magazine)*, 53(1), 0.

Schmidt, R., Boraie, D., & Kassabgy, O. (1996). Foreign language motivation: Internal structure and external connections. *Language learning motivation: Pathways to the new century*, 2, 9-70.

宇野久恵. (2008). 米国の公立小学校におけるバイリンガル教育—日本語・英語の双方向イメージングプログラム—. *立教女学院短期大学紀要*, 40, 103-112.

Vallerand, R. J., Pelletier, L. G., Blais, M. R., Briere, N. M., Senecal, C., & Vallieres, E. F. (1992). The Academic Motivation Scale: A measure of intrinsic, extrinsic, and amotivation in education. *Educational and psychological measurement*, 52(4), 1003-1017.